

保育者・教員養成校におけるピアノ初学者への指導法

著者	田中 慈子
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	55
ページ	201-209
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000860/

保育者・教員養成校におけるピアノ初学者への指導法

田中 慈子

はじめに

保育者・小学校教員には多種多様な音楽表現が求められるにもかかわらず、昨今、本学に入学する学生の約半数にあたる48%がピアノ初学者である。一オクターヴの音階の指くぐりから学び始める全くの初心者から、長年ピアノを習い続けていて特技とする学生まで、他の科目に比べ、入学時のスタートラインの個人差が非常に大きい科目である。そのため初心者はもちろんのこと、ピアノに不安を抱く学生の声は入学前から多い。ピアノが弾けなくて恥ずかしい、個人レッスンを一対一で受けることにプレッシャーを感じる、など初心者にかかる精神的負担は想像に難くない。

そこで、本学では、一年生の前期からあえてピアノ個人レッスンを導入せずに、まずはピアノと同等に重要となる声楽と楽典を学び、夏休みにピアノ初学者講座を行った後、一年生の後期からピアノ個人レッスンに無理なく入っていけるカリキュラムを組んでいる。

本人の多大な努力により、初学者講座の受講を経て、順調にピアノに親しんでいける学生もいれば、何らかの理由により波に乗れないままピアノ嫌いになってしまう学生もいる。

本稿では、授業「音楽Ⅲ」とそれに伴う補講の実践報告を通して、特にピアノ初学者のつまづきに着目し、学生への有効な指導方法の在り方について考えてみたい。

I 研究目的と方法

1 研究目的

本稿の目的は、授業「音楽Ⅲ」(2年生前期、必修科目)に伴って実施した補講を受講した学生のうち、特に大学に入学してからピアノを始めた初学者に対する指導方法の有効性と補講の意義を検証し、今後の指導の在り方を検討することにある。

2 方法

補講受講時の学生の状況と学生への指導の経過を、授業内ピアノ個人レッスン記録カルテや補講受講後の学生のリフレクションペーパーと照らし合わせて考察し、補講における指導の有効性と補講の意義を検証する。なお、学生には個人が特定できない範囲で、授業研究の資料となる場合があることへの了承を得ている。

II 授業実践と考察

1 研究対象授業「音楽Ⅲ」の概要

この授業は、表1のとおり、1年生前期「音楽Ⅰ」で声楽と楽典、後期「音楽Ⅱ」でピアノと楽典を履修した学生が、2年生前期「音楽Ⅲ」ではピアノと器楽合奏を学ぶ。保育者・教員として求められる音楽の基礎的技能を身につけることを目標としている。

- (1) 授業科目名：「音楽Ⅲ」(2年生前期、必修科目)
- (2) 調査期間：平成29年4月6日から平成29年8月3日
- (3) 音楽科目の教育内容：表1参照
- (4) 使用テキスト：表2参照
- (5) バイエル必修曲：特に重要と思われる20曲を選曲、次の順番で飛ばさずに履修することとする。No.45,48,52,58,55,68,69,73,83,90,78,88,91,93,94,96,80,98,100,104
- (6) 試験課題曲：
 - 中間試験→幼児教育コース 生活曲3曲、学校教育コース 歌唱共通教材2曲
 - 期末試験→幼児教育コース 必修月歌2曲、学校教育コース 歌唱共通教材2曲
 - 両コース共通 バイエル104番以上のピアノソロ曲1曲 いずれも暗譜演奏のこと
 - なお、受講生の期末試験時における、ピアノソロ演奏曲は表3を参照

表 1：4 年間の音楽教育内容

学年	期	科目名	必修/ 選択	ピアノ個人 レッスン (1人あたりの時間)	集団授業内容	ピアノ課題 最低到達目標	弾き歌い最低到達目標		実習の予定	
							幼児教育 コース	学校教育 コース	幼児教育 コース	学校教育 コース
1 年生	前期	音楽Ⅰ	必修	無	声楽と楽典					
	後期	音楽Ⅱ	必修	有 (22分)	楽典とコード 伴奏	バイエル 88 番	必修課題曲 から 8 曲	歌唱共通教 材曲を 7 曲		
2 年生	前期	音楽Ⅲ	必修	有 (22分)	器楽合奏	バイエル 104 番	必修課題曲 から 8 曲	共通教材 曲を 7 曲	幼稚園観察 (1 週間/6 月)	
	後期	音楽Ⅳ	必修	有 (22分)	身体表現のた めの音楽、 合唱、歌唱 共通教材	・幼児教育→課題無 ・学校教育 →ブルグミュラー以 上のピアノ曲 1 曲	月歌 24 曲 + 生 活曲 3 曲 = 合計 27 曲 (既習曲含む)	第 4 学年以 上の 歌唱共通教 材 12 曲	保育所Ⅰ (10日間/10月下旬) 保育所Ⅱ施設 (1月から3月)	
3 年生	前期	音楽Ⅴ	選択	有 (22分)	乳幼児の音 乐的発達、 歌唱指導法	ブルグミュ ラー以上のピ アノ曲 1 曲	幼児歌曲必修曲 36 選クリア (既習曲含む)	時間割の都 合上、 履修不可能	幼稚園実践 (3週間/9月中旬)	小学校 教育 (4 週間/ 9月上旬)
		音楽科 指導法	小免	無						
	後期				未開講				保育所Ⅱ・Ⅲ (10日間/11月下旬)	保育所Ⅰ (10日間/ 10月後半)
4 年生	前期	音楽Ⅵ	選択	有 (隔週 30分)		未定				
	後期	音楽Ⅶ	選択	有 (隔週 30分)		未定				保育所Ⅱ (10日間/ 11月前半)

表 2：使用テキスト（H27・28 年度入学生対象）

コース共通	・バイエル教則本（各社）
	・ブルグミュラー 25 の練習曲（各社）
	・ソナチネ・アルバム 1 巻（各社）
	・こどものうた 200（チャイルド社）
	・保育士・幼稚園教諭・小学校教諭のための ピアノ・テキスト（カワイ出版）
幼児教育	・続こどものうた 200（チャイルド社）
学校教育	・教員養成課程 小学校音楽科教育法 (教育芸術社)

表 3：音楽Ⅲ期末試験 ピアノ演奏曲 分布表

演奏曲	H28 年度生	H29 年度生
バイエル 104 番以下	1	4
バイエル 104 番	34	41
ブルグミュラー	13	19
ソナチネ	7	13
ソナタ	3	1
その他	2	6
音楽Ⅲ受講者数	60	84 (再履修 2 名含)
ピアノ初學者講座受講者数	29	39

2 授業科目「音楽Ⅲ」に伴って実施した補講の概要

- (1) 補講実施日と実施時間：全 5 回、各 90 分
 - ① 平成 29 年 7 月 5 日（水）
 - ② 平成 29 年 7 月 12 日（水）
 - ③ 平成 29 年 7 月 19 日（水）
 - ④ 平成 29 年 7 月 21 日（金）
 - ⑤ 平成 29 年 7 月 25 日（火）
- (2) 補講受講対象学生：「音楽Ⅲ」を受講する学生
84 名のうち、補講を希望する者
- (3) 補講指導内容：「音楽Ⅲ」の最低到達目標であ

るバイエル 104 番を中心としたピアノソロ曲と
弾き歌い課題のピアノ個人指導

3 補講実施の経緯と時期

補講を実施した経緯であるが、数人の学生からの強い希望を受けたことによる。今回、新たな試みとして、補講を希望した学生だけでなく、科目受講生全員に補講日を周知し、学生の意志による自由参加制とした。これまで行ってきた補講と異なる点は、一つに、受講対象学生が、これまでは教員が支援を要すると判断し

受講を促した学生であったが、今回は学生の意志による参加であること、二つに、実施開始終了時間を設定したことの二点が挙げられる。

表4のとおり、「音楽Ⅲ」の授業は、第1回4/6から開始され、第14回7/27と第15回8/3に授業内試験を迎えるわけであるが、その間、6/12-6/16までに初

めての実習、幼稚園観察実習を経験する。今回の補講は、学生が実習から帰学後、まず第1回を実施し、ここでの学生の取り組み方を鑑み、結果として、試験までの約1か月間、毎週計5回の補講を実施することとなった。

表4：平成29年度 音楽Ⅲ ピアノ個人レッスン記録カルテの一例（4名ともピアノ初学者である）

回	月 日	学校教育学生 A	学校教育学生 B	幼児教育学生 C	幼児教育学生 D
1	4月6日	(ガイダンス) BEY91、おぼろ月夜、 子もり歌	(ガイダンス) <u>BEY96、80、子もり歌</u>	(ガイダンス) おかえりのうた、おはよう、 おべんとう	(ガイダンス) BEY80 おかえりのうた
2	4月13日	BEY91、おぼろ月夜	カルテ未記入	おかえりのうた、おはよう、 おべんとう	<u>BEY80、BEY98</u> おかえりのうた、おはよう、 おべんとう
3	4月27日	BEY91、おぼろ月夜、 子もり歌	スキーの歌、 <u>越天楽今様、ふるさと、 こいのぼり</u>	<u>BEY91</u> おかえりのうた、おはよう、 おべんとう	<u>BEY98</u> おかえりのうた、おはよう、 おべんとう
4	5月11日	<u>BEY91、おぼろ月夜、 子もり歌</u>	スキーの歌、ふるさと、 <u>越天楽今様、子もり歌</u>	<u>BEY93</u> おかえりのうた、おはよう、 おべんとう	BEY100、まめまき おかえりのうた、おはよう、 <u>おべんとう</u>
5	5月18日	(集団授業 中間試験リハーサル) おぼろ月夜、子もり歌	(集団授業 中間試験リハーサル) <u>越天楽今様、子もり歌</u>	(集団授業 中間試験リハーサル) おかえりのうた、 <u>おはよう、 おべんとう</u>	(集団授業 中間試験リハーサル) BEY100、まめまき
6	5月25日	(中間試験) おぼろ月夜、 <u>子もり歌</u>	(中間試験) おぼろ月夜、子もり歌	(中間試験) おはよう、おべんとう、 <u>お かえりのうた</u>	(中間試験) おはよう、おべんとう、 おかえりのうた
7	6月1日	BEY93、BEY94	バイエル 98、 <u>こいのぼり</u>	<u>BEY93、BEY94、BEY96、 おべんとう</u>	<u>BEY100、BEY104、 まめまき</u>
8	6月8日	BEY93、 <u>BEY94、 BEY96</u>	カルテ未記入	BEY80、BEY98、 かたつむり	BEY104、 <u>しゃぼんだま、 たなばたさま</u>
9	6月22日	BEY96、BEY80	カルテ未記入	<u>BEY80、BEY98、かたつむり</u>	<u>BEY104、たなばたさま</u>
10	6月29日	<u>BEY96、BEY80、 われは海の子、冬げしき</u>	<u>BEY98、BEY100、 冬げしき</u>	BEY98、BEY100、 おもいでのアльバム	ブルグミュラー「バラード」 <u>とけいのうた、たなばたさ ま、どんぐりころころ</u>
11	7月6日	<u>BEY80、BEY98、 われは海の子、冬げしき</u>	<u>BEY100、BEY104、 冬げしき</u>	BEY98、BEY100	ブルグミュラー「バラード」 <u>たなばたさま、どんぐりころころ</u>
12	7月13日	<u>BEY98、BEY100、 われは海の子</u>	<u>BEY104、冬げしき、 おぼろ月夜</u>	<u>BEY98、BEY100、 BEY104、 やまのおんがくか、みずあ そび、おもいでのアльバム</u>	ブルグミュラー「バラード」 <u>どんぐりころころ、うみ</u>
13	7月20日	(集団授業 期末試験リハーサル) <u>BEY100</u> 虫の声、うさぎ、 われは海の子、冬げしき	(集団授業 期末試験リハーサル) <u>BEY100</u> 虫の声、うさぎ、 われは海の子、冬げしき	(集団授業 期末試験リハーサル) <u>BEY100、BEY104</u> やまのおんがくか、みずあ そび、おもいでのアльバム	(集団授業 期末試験リハーサル) 試験曲、うみ
14	7月27日	期末試験①と振り返り <u>BEY104</u>	期末試験①と振り返り <u>BEY104</u>	期末試験①と振り返り <u>BEY104</u>	期末試験①と振り返り ブルグミュラー「バラード」
15	8月3日	期末試験②と振り返り われは海の子、 <u>冬げしき</u>	期末試験②と振り返り 冬げしき、おぼろ月夜	期末試験②と振り返り <u>みずあそび、おもいでのアльバム</u>	期末試験②振り返り とけいのうた、たなばたさま

※下線曲は合格を示す

4 受講学生数と主な受講曲の傾向

受講学生数であるが、補講時間中、出入り自由、個人レッスンを希望しない学生もいたため、正確な数は定かでないが、おおよその人数は次のとおりである。第1回23名、第2回14名、第3回3名、第4回8名、第5回38名であった。また、他の授業や行事と重なり、回によっては、受講したくてもできなかった学生もいたため、受講学生数から受講傾向を分析することは難しい。

次に主な受講曲であるが、回により、ばらつきがあったことが興味深い。第1回はバイエル100番、104番が多く、次に98番、80番と続いたが、第2回ではバイエル100番、98番。第3回と第4回ではバイエル100番と104番とソナチネ、最終の第5回はバイエルだけでなく、ブルグミュラー、ソナチネとバラエティーに富んでいた。

以上のことから、第1回は、試験日までに最低到達課題に達するか不安を抱いていた主にピアノ初学者の受講率が高く、人数も多かったが、ここで100番、104番に取り組んでいた学生（参加人数の約半数）は試験への目処がたち、第2回以降は参加しない傾向がみられた。第5回は、試験直前の開講であったため、試験時に演奏するグランドピアノでリハーサルすることが目的で、積極的に友人と誘い合って参加した学生もいたことから、参加者が多かったと推察される。

表4は学生の「音楽Ⅲ」におけるピアノ個人レッスンの進捗状況の一例である。多くの学生は、幼稚園観察実習を終えて一息ついた第9回目の授業の頃から、ピアノの課題が滞っていることに気が向く。学生Aのように、残り5回のレッスンで難易度の高いバイエルを5曲も合格しなければならない学生も少なくなかった。一時は単位取得を諦めかけた学生もいたが、補講を受講する中で同じような進捗ながらも懸命に頑張っている仲間に励まされて、「やればできる」を合言葉に練習に取り組むようになった。そこからの成長は筆者の予想をはるかに上回るもので、仲間の存在、気持ちの持ち方から生まれる集中力が大きな力を生み出した。後述する学生の感想にもあるが、特に中間試験課題の生活曲のリズムに苦戦し、ピアノソロ曲と弾き歌いの両立ができなかったことがカルテの記録からも読み取れる。実習前までのレッスンでバイエルをいかに計画的に進められるかが、次年度以降の指導の鍵となるといえよう。

5 補講の指導形態

学生の意志による自由参加としたため、補講当日に受講人数が決まる。また90分の補講時間中、出入りもあることから、通常の授業における一人あたり何分と確約しての個人レッスンはできない。30台の電子ピアノを備えた音楽室で、参加者が多い回では、教員1人が学生一人当たり3分巡回するレッスン形式で、できるだけ一人あたり2回巡回できるよう心掛けた。通常授業にて個人レッスンを受けているため、わからないところのみ質問を受ける形式で行った。

前述したとおり、今回の補講は開始時間と終了時間を設定し、限られた時間内で行った。その結果、学生一人あたりに指導する時間は参加人数によっては非常に短い回もあったが、学生も教員も良い緊張感をもって取り組むことができ、また、参加者どうし教えあう姿もあり、長時間補講を実施していた頃よりも成果が上がったように感じる。

6 学生のつまずきと指導方法

定期的に5回の補講を実施して、つまずいている学生には以下のような共通した問題点があることが浮き彫りになってきた。

- ・家では弾けているのに、先生の前や試験になると弾けないと感じている。
- ・たくさん練習しているのに合格できないので、自分にイライラしてしまう。
- ・ピアノのレッスンがあると思うと、その日は一日憂鬱でたまらなく、ピアノが好きでない。

そこで、今回の補講では、授業内の個人レッスンでは時間の制約上、取り組むことが難しいと思われる以下のような指導を試みた。

(1) 学生の意識改革—『弾ける』と『練習した』—

試験後やレッスン後の学生との対話の中で、どちらかといえばピアノを苦手とする学生の多くは「家で弾けていたのに試験で弾けなかった。」と申し出るため、その場でもう一回弾かせたところ、やはり弾けなかった。何度も練習してから弾けるは『弾ける』とはいえない、と学生が自覚できるような意識改革の機会が必要である。その際、言葉で指導するだけでなく、その場で演奏させたいうで、グループディスカッションをすると、学生への意識改革がより明確になった。

教員は、楽曲指導や技術指導を行うだけでなく、ときに学生と対話することで、学生の意識や悩みを理解し、寄り添うことが重要である。その指導は、集団授業、個人レッスン、試験後の講評など、さまざまな機会に継続して行うことが大切である。

(2) 楽曲分析の実践—バイエル 104 番を例として—

練習しているのに弾けない学生は、試験日までに課題をこなさなければならないことから、焦りが先立ち、理解しないまま繰り返し練習をしている傾向にある。そのような学生には、一緒に簡単な楽曲分析を試みる指導が有効だと考えられる。

ここでは、今回の補講時に、学生と共に実際に試みたバイエル 104 番の楽曲分析を取り上げる。

バイエル 104 番の楽曲分析 (本稿末の譜例参照)

① 構成の理解

提示部 (1~24 小節) —展開部 (25~32 小節)—
再現部 (33~48 小節)

まず、調がへ長調であり、調号がシに b 1 個ついていること、八分音符が 1 拍の基本となる 3/8 拍子であることを確認する。続いて、全体の構成がソナタ形式でできていることを確認し、各自の楽譜に提示部—展開部—再現部と書き込む。

② 各部の理解

次に、以下の各部の構成を各自楽譜に書き込む。

提示部 1~24 小節 (24)

A 1~8 小節 (8) へ長調

移行部 9~14 小節 (6) へ長調~ハ長調

B 15~24 小節 (10) ハ長調

展開部 25~32 小節 (8)

C 25~32 小節 (8) ハ長調~へ長調

再現部 33~48 小節 (16)

A の縮小 33~36 小節 (4) へ長調

移行部 37~38 小節 (2) へ長調

B 39~48 小節 (10) へ長調

③ 左手の動きの理解

本学では、1 年生後期科目「音楽Ⅱ」の集団授業において、ハ長調、へ長調、ト長調、二長調のスケールとカデンツを学んだ後、3 コードを使った簡単なコード伴奏法を指導している。その際、学生の頭と身体との理解の一致を促すために、和音進行に伴う左手の動きを表 5 のとおり、掛け声をしながら弾くことでわかりやすくしている。この掛け声の方法は、甲斐 彰 著「コード伴奏にチャレンジ! らくらく弾けるピアノコード スリーコードから始めるステップ 17 らくらく弾けるピアノコード」(音楽之友社) を参考にアレンジした。

表 5: 和音進行に伴う左手の動きに対する掛け声の方法

ハ長調:	G	C	F
へ長調:	C	F	B

V (V7)	←	I	→	IV
	→		←	

掛け声: 左 お家(主調) 右

その方法を 104 番においても取り入れ、左手の分散和音を三和音にした後、動きの掛け声を言いながら左手を全部弾いてみる。特に提示部のへ長調からハ長調への転調を伴う移行部 (9~14 小節) を苦手とする学生が多いため、この移行部に、へ長調を自分のお家と見立て、へ長調からハ長調のお家へ迷いながら引っ越しする過程であり、最終的にはハ長調のお家に遊びに行く、といったストーリーと、併せて表 6 のような掛け声をつけている。

移行部を弾き直していたほとんどの学生は、表 6 の指導をすると、「なんだ、そういうことか。すごく楽しい。」と反応し、迷っていた悩みが解決して、確実に弾くことができるようになった。つづく、提示部の B 部分は付点四分音符の保持音がポイントになってくるが、左手の動きの掛け声を「(ハ長調の) お家→ちちんで→お家→ちちんで… (以下、同じ)」とした。

表 6: 和音進行に伴う左手の動きに対する掛け声の方法

小節番号 掛け声	9, 10 (へ長調の) お家	→	11 左	→	12 お家	→	13 右	→	14 もっと右に 昇って	→	15 (ハ長調に) 到着
ストーリー	私のお家はへ長調		左のお家はどんな人が住んでいるかな?!		お家に戻る		では、右のお家はどんな人?!		さらに右のお家は?!		やった~、ハ長調のお家で遊んで行こう!

④ B のリズムと音型パターンの理解

15小節でハ長調に到着すると、複雑なリズムと一六分音符の細かい音の動き B が学生を待ち受けている。楽譜を一見して、学生は、なんだか難しいそう、自分に弾けるのかな、と不安を抱く。

まず、つまずくのが、15小節目の付点のリズムである。そこで、3/8拍子における付点八分音符（ド～お～お）を一六分音符（ド・ド・ド）と置き換え、右手（ド・ド・ド・ミ・レ・ド）を歌いながら左手を弾く練習を重ねる。次に、音型に注目する。16、17小節は一六分音符が昇って3度降りてのパターンが二度続き、18小節目で昇りきる。この一連の4小節のパターンが一オクターヴ上で繰り返され、最後はハ長調のIの和音で合奏風に締めくくられる（パッ・パッ・パッ）。4点ハから2点ハへの大跳躍が、学生にとってもう一つの壁となる。まず、譜面と鍵盤のドの高さを一致させた後、23～24小節のみ部分練習をする。その時、この締めくくりには「ドミソ」のハ長調のIの和音だけで成り立っていることを学生に意識させることが大切である。

なお、再現部において、ハ長調として現れる B であるが、シにbをつけていることを学生に意識付けするのみで、自分で練習して弾けるようになった。

(3) 有効な練習方法の定着化

第1回の補講時にバイエル80番をレッスンした学生は、何回か最初の8小節を弾いたが、いつも同じところを間違えるにもかかわらず、自分がどこを間違えるかの意識が全くなかった。4小節+4小節=8小節をトロツコに見立てて、いつも間違える箇所の譜面上に、学生自身が鉛筆でマークをつけ、間違えなくなったらマークを消す練習方法に取り組みさせた。練習方法を身に付けることで、続くバイエル98番、104番と曲が進むにしたがって、仕上がりが目に見えて速くなった。試験時も落ち着いてスムーズに演奏できた。学生がこの練習方法を定着化するには、レッスン時にできるようになるまで、練習方法を教員が共に試すことが重要だと思われる。

また、バイエル104番において楽譜の運指を無視して自分流で弾いているために、フレーズとのつながりでつまずいてしまう学生がいた。本人は弾くことに必死で、自分が間違った運指で弾いている意識すらな

かった。運指以前に、次のフレーズに移る際に必要以上に手を動かしてしまう癖が原因であったため、学生がモチーフごとのポジションと運指が頭と体で理解できるよう、鍵盤と指の一致を一音一音確認しながら、無駄のない運指で書かれていることを確かめた。ここでは、学生自身が楽譜に指定されている運指が、合理的であると納得するまで繰り返し練習することが大切であった。

7 学生の学び

「音楽Ⅲ」補講受講後、学生から感想を得たものうち、主なものを抜粋する。類似の感想は筆者が取りまとめた。

※成長を感じたこと

- ・ 中間試験、期末試験は、とても自分のためにはなるけれど、日程的にギリギリで毎回のテストが緊張で苦痛だったが、補講を受講して今まで悩んでいたことがすぐできるようになると、とても嬉しかった。
- ・ ピアノは正直好きではなくて嫌だなと思うけれど、練習したら私でも104番までいけたし、104番まで弾けたという達成感と自信にはつながると思う。来年の二年生も頑張ってもらいたい。

※反省点と今後の目標

- ・ 計画性がなく、毎回（授業）後半に焦ってギリギリで仕上げているので、しっかり計画を立てて、取り組まないといけないと思う。もっと練習量を他の人よりやらないといけないと思う。
- ・ 弾けていないのに弾けたと勘違いして練習している。いきなり弾いてみたり、誰かに聞いてもらったりしながらやっていかないといけないと思った。
- ・ いまいち理解しきれないまま、ただ指を動かして練習していただけだった。家や学校で、ひとりで練習するときは、初めて弾くものは全く進まないことが多かった。曲を流れて覚えたりするのではなく、部分部分で練習をするべきだったと思う。

※レッスンについて思うこと

- 一人に与えられた個人レッスンの時間は約22分なので、宿題のチェックと問題点を重点的に取り組むだけで時間はあっという間に過ぎてしまう。姿勢や手の形、指番号などのことは注意されても、注意だけでどうすればマシになるかまでできなかつたのが、個人レッスンでの大変だなと感じたところだ。個人レッスンでの疑問や注意されたことなどを、補講時に色々な方法で教えてくださり、練習方法のメモを残してくださったのが、一人で練習をするときにとても役に立った。
- ひとりで練習しても間違えてしまったり、なかなか進まないまま次のレッスンを迎えてしまうことがあるので、先生にレッスン以外で質問できる機会はこれからもテスト前などにつくっていただきたい。試験前の補講はとても有り難くて、とても有意義な時間だった。ありがとうございました。

大学に入学してピアノを学び始めた学生にとって、「音楽Ⅲ」終了時点でピアノ学習歴はちょうど一年になる。その間、初心者ながらも練習のペースを自分なりに掴んで、これほど弾けるようになるとは思ってもみなかった、と感じている学生もいた。一方で、補講を受けた学生の感想にあるように、やる気はあっても、一人では練習の仕方がわからなかったり、正しいかどうかの判断がつかなかったり、辛く苦しい思いをしている学生もいる。初心者の多くは不安を抱きながらも教員を志して入学してくるため、学び始めはやる気にあふれている。ところが、いざ授業が始まり、一年経つと鍵盤アレルギーになり、ピアノの存在が負担になる学生を生み出す。これには指導者として大きな責任を感じざるを得ない。

一方で、筆者が学生をつまずきの原因として挙げた点が、学生自身も自分の問題点として受け止めていることがわかったことは喜ばしい。また、学生が、辛く苦しさを感じながらも、できたという達成感を学びの過程や試験において味わったことで、次への学びの意欲につながったことも見て取れた。

上記には挙げなかったが、一年ピアノを経験すると初心者という甘えは許されなくなるとの感想もあつ

た。初心者であっても教員として求められる力を身に付けなくてはいけないという学生の覚悟の表れに成長を感じた。

以上のことから、今後の課題は残すものの、補講における学生への指導は一定の効果があったといえよう。

おわりに

大学入学時に全くピアノが弾けなかつた学生が、一年の学びを経て、人前でピアノを弾きながら歌えるようになる。彼女たちの身を削るような努力に目頭が熱くなる。

入学生の約半数がピアノ初心者である現状から、バイエル修了程度までは、到達すべき課題に追われる授業内の個人レッスンでは対応しきれない部分を補う機会は、ピアノに不安を感じている学生のモチベーションを高めるために必要不可欠であるといえる。ただし、学生は卒業後、教員として独り立ちすることが求められる。今後支援を行う際、学生が補講に依存しすぎないように、指導にあたることが重要である。ここでの補講の目的は、課題を間に合わせるのではなく、あくまでも、学生が独力で練習できる力をつけるための支援である。幸い、昨年度、個別で補講をした学生は、正しい練習方法を身に付け、授業内のレッスン時間を有意義に使えるようになった。練習すれば自分でも弾けるという喜びと自信が、ピアノに向かう時間につながったようである。「あれだけ嫌だったピアノが、今では楽しいと感じるようになった」との報告を受けている。その学生の楽譜には、和音進行を色分けした跡やフレーズごとに区切った跡がみられたことから、自分でかんたんな楽曲分析を行って効率よく練習していることが確認できた。

この学生は上手く自立できた一例であるが、この学生の成長からも楽曲分析は有益な指導法の一つであるといえる。これまでは主に補講で指導していたが、今年度からはピアノ個人レッスンが始まる「音楽Ⅱ」の集団授業内で全体に指導するのが適切であると考えている。

また、本学の音楽科目は、筆者が担当する集団授業と非常勤講師が担当するピアノ個人レッスンから成っているため、双方が連携することで、様々な方法による学生への指導が可能となる。個人レッスンと集団授

業、それぞれ対応しきれない部分もお互いが補い合ったり、また、時として同じ内容の指導を行ったりもできる。今期も早い段階から、ピアノ個人レッスンでの学生の学びの様子、頑張りやつまずきについて報告を受けていたため、それを活かした補講ができた。学生との対話はもちろんのこと、授業アンケート調査やレポートの回数を増やし、ピアノ、声楽、集団授業の教員が、その時々での学生の思いや悩みを共有することで、学生の意欲を引きだせる指導法の在り方を日々検討していきたい。

謝辞

授業と補講を受講して真摯な意見や率直な感想を寄せてくれた学生の皆さんと、熱心に個別指導にあたって下さった音楽非常勤の先生方に心より感謝します。

使用楽譜

「標準バイエルピアノ教則本」全音楽譜出版社(2008)、
p.71

参考文献

- 甲斐 彰「コード伴奏にチャレンジ! らくらく弾ける
ピアノコード スリーコードから始めるステップ 17
らくらく弾けるピアノコード」音楽之友社(2009)、
p.8-15
- 島岡 譲「和声と楽式のアナリゼ」音楽之友社(1964)、
p.95、p.104-105
- 奥 千恵子「保育者養成と演奏技法(Ⅱ)ーピアノ初心者対象の入学前教育の取り組みー」四天王寺大学
紀要 第55号(2013)、p.325-341
- 磯部 澄葉「保育者養成におけるピアノ初心者へのレッスン支援ーコードネーム・リズムピックを用いた指導法の提案ー」金城学院大学論集 人文学編 第10巻第2号(2014)、p.19-31

譜例：バイエル 104 番

提示部 **Allegretto**

104. *dolce*
legato

移行部

cresc. *dim.* ドドドミレド

お家 → お家 → 左 → お家 → 右 → もっと右 → 到着 保持音

cresc. *p* *cresc.* *f* *dim.*

ヤン・パツ・パツ・パツ

展開部

dolce

再現部

p

保持音

cresc. *p* *cresc.* *f*

